三宅義子さんの思い出

闘う学者、三宅先生

板橋 めぐみ

私は2000年前後の3年半ほど、山口市に住み、山口県立大学の学生サークルのメンバーと行動を共にしていた。そのサークルの顧問の先生が三宅先生だった。サークル活動の他にも市民運動に明け暮れる私に、闘う武器としての理論を身に着けるべきと、三宅先生は院への進学も勧めてくださったのだが、結婚を予定していた関係で上京してしまった(そのおかげで、東京の山川菊栄賞の授賞式に駆けつけることができ、先生も喜んでくださった)。

その後10年ほどたって再び山口市へ転居したが、シングルマザーゆえの時間のなさから、先生とゆっくりお話する間もなく、突然のお別れとなってしまったのが本当に悔やまれる。

私の中の三宅先生は、「社会変革を求めて闘う学者さん」だ。それはウーマンリブの当時から女性解放運動に関わってこられたからというだけではない。

山口市にある「男女共同参画センター」の図書コーナーには「慰安婦」問題に関する書籍は一冊もない。三宅先生が退職されて以降、元の職場である山口県立大学のカリキュラムから女性学はなくなった。元々「良妻賢母」を育てる女子大だったから、仕方のないことか。三宅先生は、そうした厳しい環境にある保守王国・山口の地で行政主導の「男女共同参画」にも協力しつつ、吠え続けてこられた方だ。

アカデミックに研究に没頭するだけではなく、最後まで山口の市民運動の現場に立ち続けられた。憲法を活かす市民の会・やまぐちや平和憲法ネットワーク・やまぐちの中心で活動された。毎月11日に取り組まれているイチイチウォーク(反戦を求める市民デモ)には、病身ながら3・11と9・11には必ず顔を出され、こだわりを示し続けられた。

岩国で取り組まれた米軍基地強化反対集会の現場でも、女性分科会でコーディネーターを務められたこともあった。沖縄で起きた女性暴行事件への調査に同行したこともある。

先生が最後に公の場に出てこられたのが5月31日にあった菅孝行さんを迎えた中谷康子さんの集会(元自衛官の夫の護国神社への合祀取り下げを求める集会)だった。私自身は別の集会に出ていたためお会いできず、最後になったのは5月3日の憲法集会だ。「あなたにもお話したいことがあるのよ」と言って通り過ぎただけで会話にもなっていなかった。先生の遺産の書籍をもとにした三宅文庫についてのお話だったと思われるが、直接お話をする機会はなかった。

入退院を繰り返しながらも、その合間に集会に参加され、最後の最後まで「闘う学者さん」だった。

三宅先生の根底には、絶望的な女性差別への怒りがあったと思う。研究テーマにも常に

虐げられた人びとの視点があった。講演をされる時には、前のめりになってしまっているような話し方が、とてもチャーミングだ。思い・怒りが溢れていて、口が追いつけないかのようだった。

「4 年制の経済学部卒の女を使うところなんかないわよ」と先生の口から何度聞いたことか。具体的には伺ったことはないが、大学卒業後、民間企業に就職した時には、それは苦労されたのだと思う。

10 年以上前に大学サークルの新歓企画で、三宅先生のお話を伺う企画に取り組んだ。そのときは「慰安婦」問題と同時に、戦前、女性解放をうたった女性たちが積極的に戦争協力をしてきたことを指摘された。

先生にとって「女性解放」は、家制度からの解放だけではなく、戦争や労働者に対する搾取からも解放されなければ実現できないものだった。だからこそ、戦争情勢が目前に迫り来る中で、最後の最後まで闘いの現場に立っていらしたのだと思うし、「慰安婦」問題に取り組むこともなく「男女共同参画」に嬉々とする山口の女性たちと反りが合わなかったのだろう。

「女性解放＝反戦、社会変革、差別との闘い」という先生の立ち位置と私の姿を重ねてくださったのか、私自身には何かと便宜を図ってくださったことは本当に感謝している。

先生は映画解説でも活躍された。『百合子、ダスヴィダーニヤ』では宮本百合子さんについて熱く語り、『天のしずく』では料理家の辰巳芳子さんについて大いに語った。私が山口にいない間にも様々な場面でご活躍されたと思う。私も知らない色々な引き出しを持っていらっしゃる方だった。

私自身も凛として立つ三宅先生について熱く語りながら、先生がやり残されたことを引き継いでいきたい。先生が「『女 9 条の会』のようなグループを作りたいわね」と言い残されたと伝え聞いている。まずはそこからだろうか。